

朝倉氏 103年の

越前支配の礎を築いた

朝倉孝景



朝倉孝景肖像 (心月寺蔵)

戦 国時代への転換点となった応仁の乱。その大乱で最も恐れられ、これを機に戦国大名として名をあげたのが朝倉孝景です。

孝景は、正長元(1428)年、越前の守護(軍事指揮官、行政官)であった斯波氏の家臣である朝倉家景の子として生まれます。孝景は幼い頃から才知に優れ、ある時、都大路を進んでいた將軍足利義教が、道端にいた幼少の孝景を一目見て、まさに英傑の相と感嘆したと伝わっています(『月舟和尚語録』)。

応仁元(1467)年、守護の

細川勝元と山名宗全の二大勢力が衝突。これに、斯波氏の内紛や將軍家の跡目争いなどがからみ、世に言う応仁の乱が始まります。細川方は東軍、山名方は西軍と呼ばれ、孝景は斯波義廉の家臣として西軍に属しました。孝景は、京都での御霊合戦や相国寺の戦いなどに参戦し目覚ましい活躍を見せます。武田信賢の軍勢を襲撃した際には、討ち取った24の首の前で宴会を開き「この首は山名宗全に見せるため置いたものだ」と語ったといわれ、その豪胆さが伝わっています。足利義政が西軍の追討令を出した際には、義廉の降伏条

件として孝景の首を要求するほど、孝景は東軍にとって恐るべき存在でした(『大乘院寺社雜事記』)。

こうした中、幕府の伊勢貞親らによる孝景の東軍への勧誘工作がなされます。文明3(1471)年5月、孝景へ「越前国守護職のことは孝景の希望どおりにする」と記された御内書と「御判(守護職補任状)が発給されるよう取り計らう」という細川勝元の書状が届きます。この御内書の発給により孝景は寝返りを決断。翌月、孝景の嫡子朝倉氏景の東軍への寝返りが明らかになり、それに呼応して孝景は越前国へ出陣しました。

ところが、御判は発給されず、孝景は非常に弱い立場での合戦を強いられることになったといわれています。守護ではなく国司と称して戦ったとされる甲斐勢との戦いには敗北します。しかし、体制を立て直し、府中攻略で勝利を収め、その後も各地で戦を繰り広げ勢力を拡大。文明7(1475)年、ついに越前平定を成し遂げました。逆境に立たされ、敗戦の苦汁をなめながらも、最後には自らの力で越前支配の正当性を獲得したのです。

下克上の先駆者ともいわれる朝倉孝景。越前国の掌握を進め、一乗谷

に城を構えるなど、国主としての施策の積み重ねがその礎を築いていったのです。その心構えは「朝倉孝景条々」として今に伝わっています。



『朝倉孝景条々』(明治大学図書館蔵)

関連史料・ゆかりの地

英林塚



(画像提供: 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

朝倉孝景の墓。「英林」という名は、孝景が出家した時の名です。この塚は、越前に危機が迫ると鳴動すると伝わっています。

【住所】 福井市城戸ノ内町(一乗谷朝倉氏遺跡の唐門から徒歩5分)

参考資料等

佐藤圭『中世武士選書23 朝倉孝景』戎光祥出版
川岡勉『室町幕府と守護権力』吉川弘文館